

大項目	2	グローバルな視点からの地域理解			
中項目	2-2	地球規模の社会・経済システム			
小項目	2-2-2	地球規模の人口，都市問題			
細項目 (発問)	2-2-2-5 都市化	先進国と途上国では，都市化のメカニズムがいかに異なるだろうか？ (先進国の都市化と途上国の都市化の違い)			
作成者名	村山祐司	作成/修正年	2017/2021/2023/2024	Ver.	1. 3
キーワード 5~10 個程度	先進国，途上国，都市化，メカニズム，人口増加				

発問の意図と説明

(1) 都市化とは

一般に、「都市的要素」が「非都市的要素」に取って代わるプロセスを都市化と呼びます。しかし研究の立場や視点によって「都市的要素」の概念が異なるため、都市化を学問的に定義することは簡単ではありません。

社会学では、農村的生活様式から都市的生活様式へ移行していくプロセスを都市化とみなし、ライフスタイルや生活意識の変化などの社会変動面を強調します。経済学では、経済活動を重視し、地域の主たる経済基盤が農業から工業あるいは第 3 次産業へ移行していく過程を都市化と定義しています。人口学の分野では、農村から都市へ人口が移動し、都市人口が相対的に増加していく人口集積過程を都市化と規定しています。

地理学では、都市化を地域的現象として捉え、中心核と機能的に結びつく範囲、すなわち都市圏が拡大していくプロセスを都市化と呼んでいます。自然・景観・土地利用、そして社会・経済・文化などの側面から動的に都市化のメカニズムやドライビングフォースを明らかにします。都市化が地球・地域環境の変化に与える影響を解明することも地理学の重要なタスクです。

(2) 先進国の都市化

周知のように、18 世紀後半にイギリスで産業革命が起きました。産業革命以前の世界は第一次産業が中心の社会であり、多くの人々は農業に従事し、彼らの生活は土地資源に依存していました。当時は自給自足経済であったため、人々は近くに農地を確保して生計を立てていました。主要な移動手段は徒歩であり、人々の居住地は土地資源からの距離の制約を強く受けました。集落のほとんどは小規模でした。この人口分布パターンを変えたのが産業革命でした。

産業革命によって工場制手工業が勃興しました。工場の稼働には多くの労働者を必要としたため、農村地域から工場が立地する地域へと大量な人口移動が発生しました。そこには、工場を取り囲むように労働者向け住宅が立地し、人口高密度で丸い形状の都市空間が形成されていきました。都市化の初期段階では、毎日徒歩で通勤したため、工場と居住地の距離は離れていてもせいぜい 2~3km でした。産業革命は、人々の生活にデイリーリズムをもたらしました。人々は、毎日一定の時間労働し、週末は休息を取るようになりました。産業革命以前は、労働は天候に左右され、雨や雪が降ると仕事を休みました。また、労働時間は日照時間に影響され、日の長い夏は、日の短い冬よりも多く働いていました。産業革命は社会的規範を確立させたのです。

19 世紀末になると、欧米の都市では郊外化が進展します。その原動力は路面電車の発達でした。通勤距離が徒歩時代と比べて 4 倍近くに伸びました。都心から外側に向かって線路沿いに住宅団地が建設され、しだいに星型の都市空間が形成されていきました。路面電車の発達は、居住地と職場の空間的な分離をうながしました。

20 世紀初頭になると、地下鉄やバスなどの公共交通機関が普及しました。面的に交通網が発達し、路面電車に依存した星型の都市形態は徐々に解消されていきます。20 世紀後半には、自家用自動車の普及によって郊外化が一層進み、広大な都市圏が形成されていきます。中心部に立地していた工場群は、用地が豊富で交通アクセスのよい郊外核やインターチェンジ付近へと移転していきました。中心部の空いた土地には代わりに商業施設やオフィスが入り、都市圏内で機能の分担が進みました。やがてドーナツ化現象が顕著になり、中心部では、夜間人口と昼間人口の差が拡大しました。一方、都市化の前線地帯ではスプロール化が進み、農村的土地利用から都市的土地利用への転換が進みました。

図と表のページ

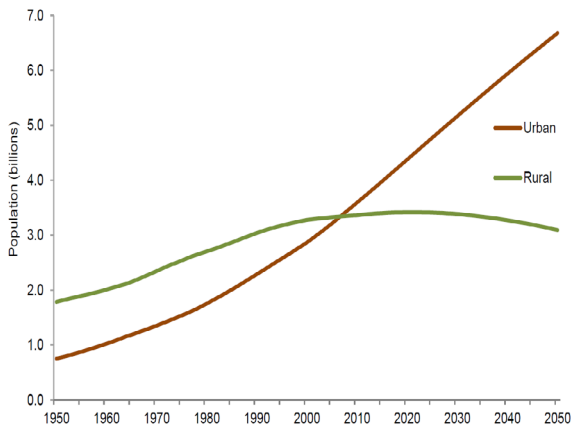


図1 世界における都市人口と農村人口の推移 (1950-2050).
 出典: United Nations (2019) *World urbanization prospects 2018*.

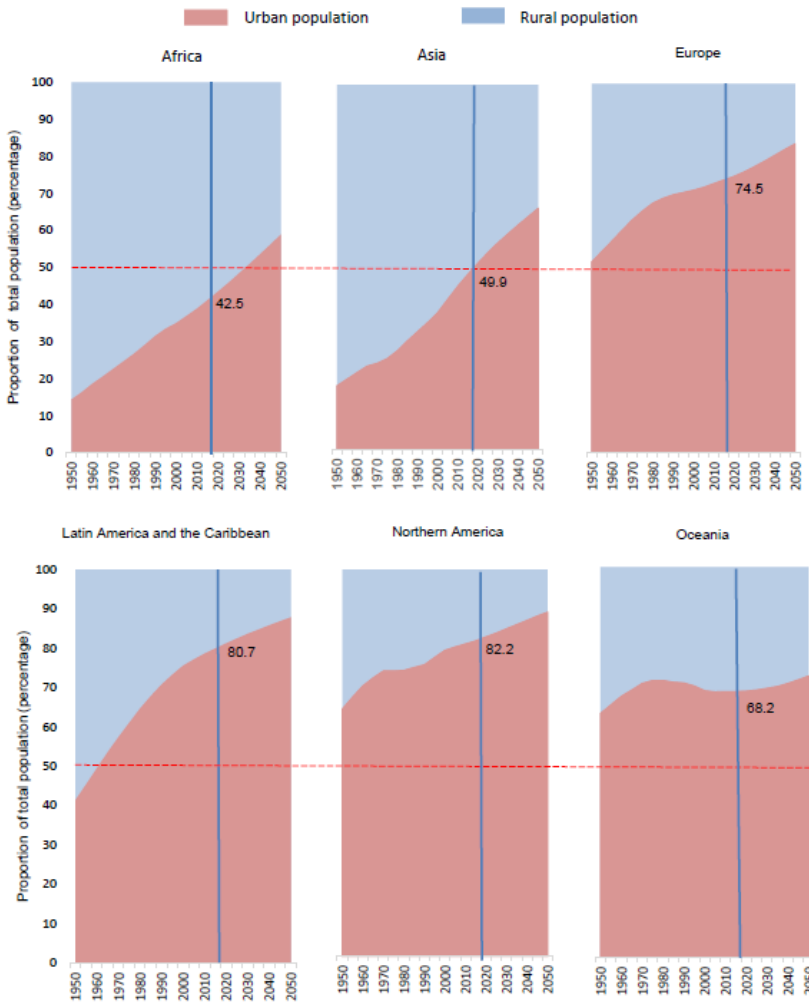


図2 世界の主要地域における都市人口と農村人口の割合の推移 (1950-2050).
 出典: United Nations (2019) *World urbanization prospects 2018*.

1970年代後半になると、欧米では、中心部から郊外への人口移動が卓越し、都市の人口が減少する反都市化現象 counter-urbanization が顕在化しました。アメリカ合衆国では、すでに1970年センサスでその兆候がみられました。広い土地を安価に取得できる郊外に中産階級やファミリー層が好んで移り住みました。一方、中心部では、建物の老朽化が進み、低所得者層の流入によりその一部はスラム化していきました。都市の過密は、地価の高騰、交通混雑、大気・水質汚染、犯罪の多発など多くの都市問題を引き起こしました。

1980年代以降になると、反都市化は欧米の大都市で普遍的にみられるようになりました。都心部に集中していた製造業やオフィスのなかには、地代が低い郊外さらには都市圏外へと移転する企業が現れました。雇用が都心に集中しなくなると、それに呼応して人口や商業機能の空間的な分散も進みました。一方、都市住民のなかには生活環境の悪化した都市化地域よりも、緑が多く、生活にゆとりがある農村や小都市を好み、都市圏外に積極的に移住する人々が増えました。中心部には移民や低所得者層が残り、市街地の荒廃が深刻化しました。

このような状況下において、市当局は公的セクター主導で再開発を進めましたが、次第に予算規模が膨らみ、市の限られた予算では再開発のマネジメントができなくなりました。このため、インナーエリアでは、地域住民による組合設立や民間資本の導入によって、コストをかけずに建物の改造や街路の修景を行うジェントリフィケーションが導入され、成功を収めました。インナーエリアは都心部に隣接し交通アクセスもよいため、新しい居住空間、商業空間としてよみがえりました。北米の大都市のなかには、エスニック風のレストランが建ち並び、観光名所としてよみがえったインナーエリアも数多いです。

今日、欧米では都市人口の空間的な分散が進み、都市化前線は都市圏の外縁部や農村地域に達しています。これらの地域にはエッジシティと呼ばれる都市空間域が出現し、都市と農村の境界が曖昧になりつつあります。人々のライフスタイルや価値観が変わり、住宅が密集した都市部よりも、スペースが広く緑も豊かで住環境のよい縁辺部が好まれるようになりました。このような人口の郊外分散をうながした大きな要因は情報通信技術の発達です。インターネットや電子メールの普及により、フレックスタイムが導入されたり、サテライトオフィスが設置されるようになりました。毎日職場に通勤する必要がなくなり、在宅勤務（テレワーク）も増えています。技術革新により生活者中心社会が深化し、居住地をベースとした働き方が若年層を中心に広がっています。

今日、欧米では、農村地域を包摂するような緩い大都市圏が作られつつあります。20世紀は交通の世紀であったが、21世紀は情報通信の世紀と言われます。20世紀には、長距離通勤が卓越し、職と住の分離が進みましたが、今日、情報通信技術の発達は職住近接をうながしています。これからは人口分布の集中化が弱まり、人口分布の空間的平準化が進むと予想されます。この動きは産業革命以前の状況に回帰していると言えるかもしれません。

(3) 発展途上国の都市化

20世紀後半以降今日まで、発展途上国においては、人口が大幅に増える人口爆発と呼ばれる現象が続いています。20世紀末になると、人口増加率が農村と比べて都市部で極めて高い「都市爆発」と呼ばれる現象も顕在化しています。とくに首都や大都市に人口が集中するようになりました。

交通網や情報通信網の整備が未成熟な地域では、低所得者層は就業地の近くに居住する傾向があります。通勤時間を短くすればその分を就業に当てられるし、交通費も節約できるからです。とくに最貧困層は職住近接を指向せざるを得ず、中心部に隣接するスラム地域に居を構える人々も多くなっています。工場が林立し労働者住宅が広がる郊外においても、不良住宅が増え、スラム化する事例が数多くみられます。スラム化は、河川敷や湿地帯など居住環境が劣る地域に現れやすい特徴があります。

発展途上国では、先進国との活発な経済交流によって首都が成長極として発展しています。国家的都市群システム自体の空間的組織力が脆弱なため、首都以外の都市群は経済成長の恩恵を受けにくい構造になっています。国内の交通・情報ネットワークが未整備なため、地方への物資の流通や情報の伝達が円滑ではありません。また国土を統括する行政組織が未確立なため、新技術や成長誘発政策が首都から他の都市群へ効率よく拡散していかないのです。このため、首都とそれ以外の都市群との経済格差はますます拡大します。

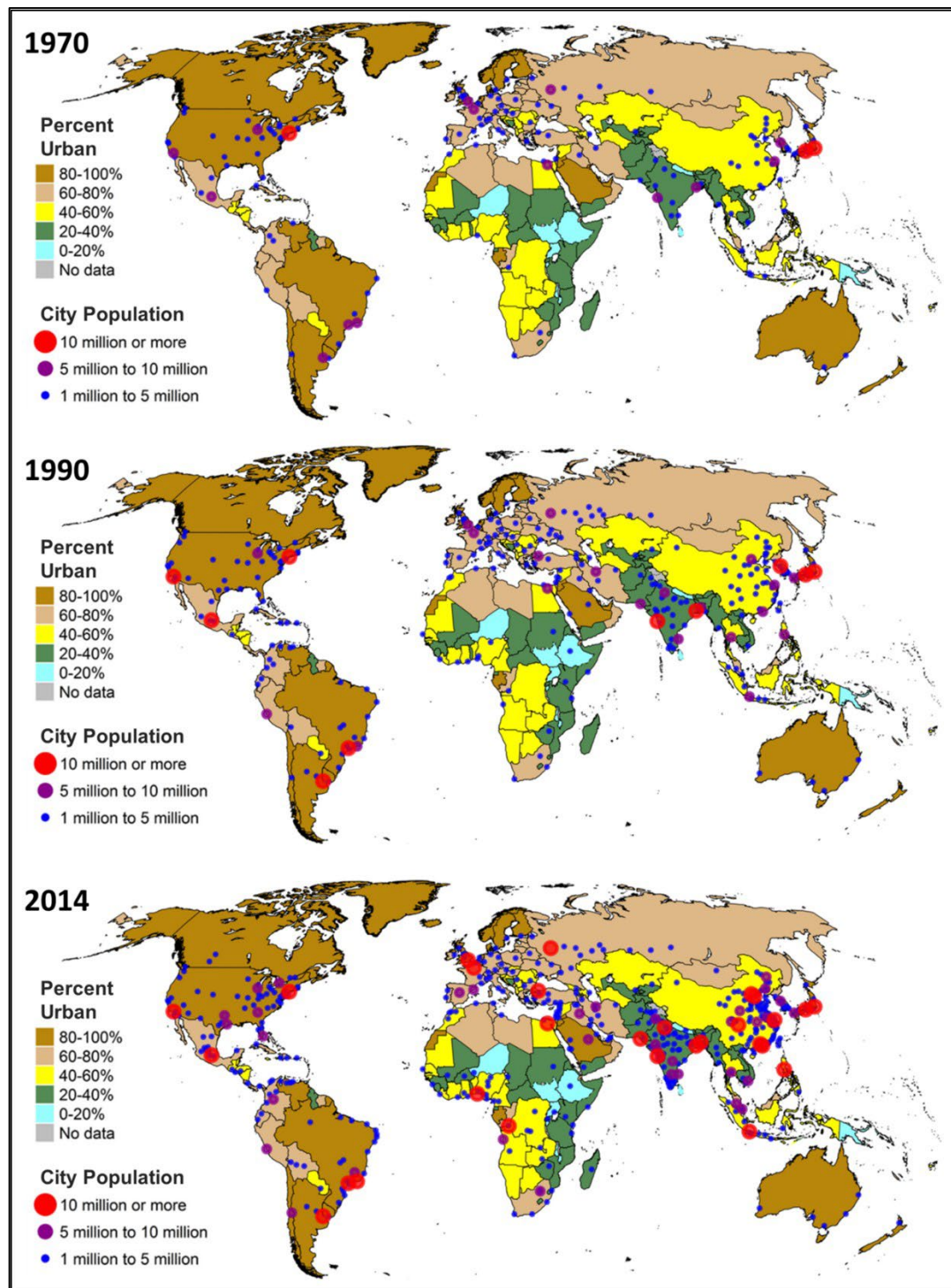


図3 世界における都市人口分布と国別都市人口割合 (1970年, 1990年, 2014年).

出典: Murayama, Y. and Estoque, R. (2020). Urbanization: Concept, Mechanism, and Global Implications. In Himiyama, Y. et al, *Human Geoscience*, Springer & Nature, 261–282. データは, World Urbanization Prospects, the 2014 revision (UN 2015)による.

発展途上国の首位都市卓越性は大都市に資本や人材の集積、知識の専門化をもたらし、交通網を拡大させ、イノベーションを波及させる原動力になります。首都への集中的な投資は、規模や集積の経済効果をもたらすので、国全体として経済的な効率性は高いといえます。その一方、負の効果も大きいのです。次の4点が指摘できます。1) 国内各地における資源の平等な利用を妨げます。2) 外国との交易を促進するが、国内の物資流通を減じてしまいバランスのとれた経済発展の障害となります。3) 生活水準の地域的な不平等を生み出します。4) 農村部を退廃させ、地域格差を広げます。

先進国の都市と発展途上国の都市は、経済のグローバル化や情報通信技術の発達を背景に、相互依存関係を強めています。とくに発展途上国の大都市では、多国籍企業の支社や営業所が立地し、外国人ビジネスマンが増えています。先進国からの観光客も増える傾向にあります。外資の流入によって先進国の金融支配が強まっています。発展途上国の都市は、相互依存関係が強固になるにつれて、先進国の意向や経済状況に直接的な影響を受けるようになり、世界的都市システムに組み込まれる傾向にあります。

今日、大都市の成長、停滞、衰退がその都市独自の力ではなく、他の都市群との関係の強さに規定されるようになりました。各国の大都市が世界的都市群システムに組み込まれ、大都市はその結節点として機能するようになったのです。ニューヨーク、ロンドン、東京などはその頂点に立ち、世界都市と呼ばれています。

(4) 近年における世界の都市化動向

1950年には、世界の全人口の30%しか都市化していませんでした。その後都市化が急速に進み、2010年には、都市人口が農村人口を上回るようになりました。国連の統計によりますと、都市人口と農村人口が同率になったのは2008年でした (United Nations, 2019)。都市化は加速度的に進行しています。1950年の都市人口は746百万であったが、2014年には39億になりました。2050年には、全世界の66%が都市人口になると推定されています (図1)。農村人口は2014年には34億でしたが、2050年までに32億に減少すると予想されています。

都市化のトレンドを地域別にみますと、ヨーロッパや北アメリカ、オセアニアでは1950年にすでに都市人口が農村人口を上回っていました。現在では70%を超えています。北アメリカでは、実に全人口の82%が都市に居住しています。一方、アフリカとアジアでは、2014年現在まだ50%に達していません。これらの地域では、今後急速に都市化が進むことが予想されます。都市人口の増加は大都市およびその周辺部で顕著です。国連の統計によりますと、1000万以上のメガシティは1990年には10都市に過ぎませんでしたが、2014年現在では28都市になり、2030年には41都市に達すると見積もられています。その大部分はアジアとアフリカに属します (図2)。

図3は、世界における都市人口分布と国別都市人口割合 (1970年, 1990年, 2014年)を示しています。図4は、発展途上国 (アフリカ, アジア, ラテンアメリカ) における都市スラム人口と都市人口に対するその割合 (国別) (2013年)を示しています。スラム人口が増え、年々居住環境が悪化していることが推察されます。

(2024年3月修正は在りません)

参考文献

Murayama, Y. and Estoque, R. (2020). Urbanization: Concept, Mechanism, and Global Implications. In Himiyama, Y. et al., *Human Geoscience*, Springer & Nature, Singapore.

UN-Habitat (2013). *State of the world's cities 2012/2013: prosperity of cities*. Routledge, New York.

United Nations (2019). *World urbanization prospects 2018*. United Nations, New York.

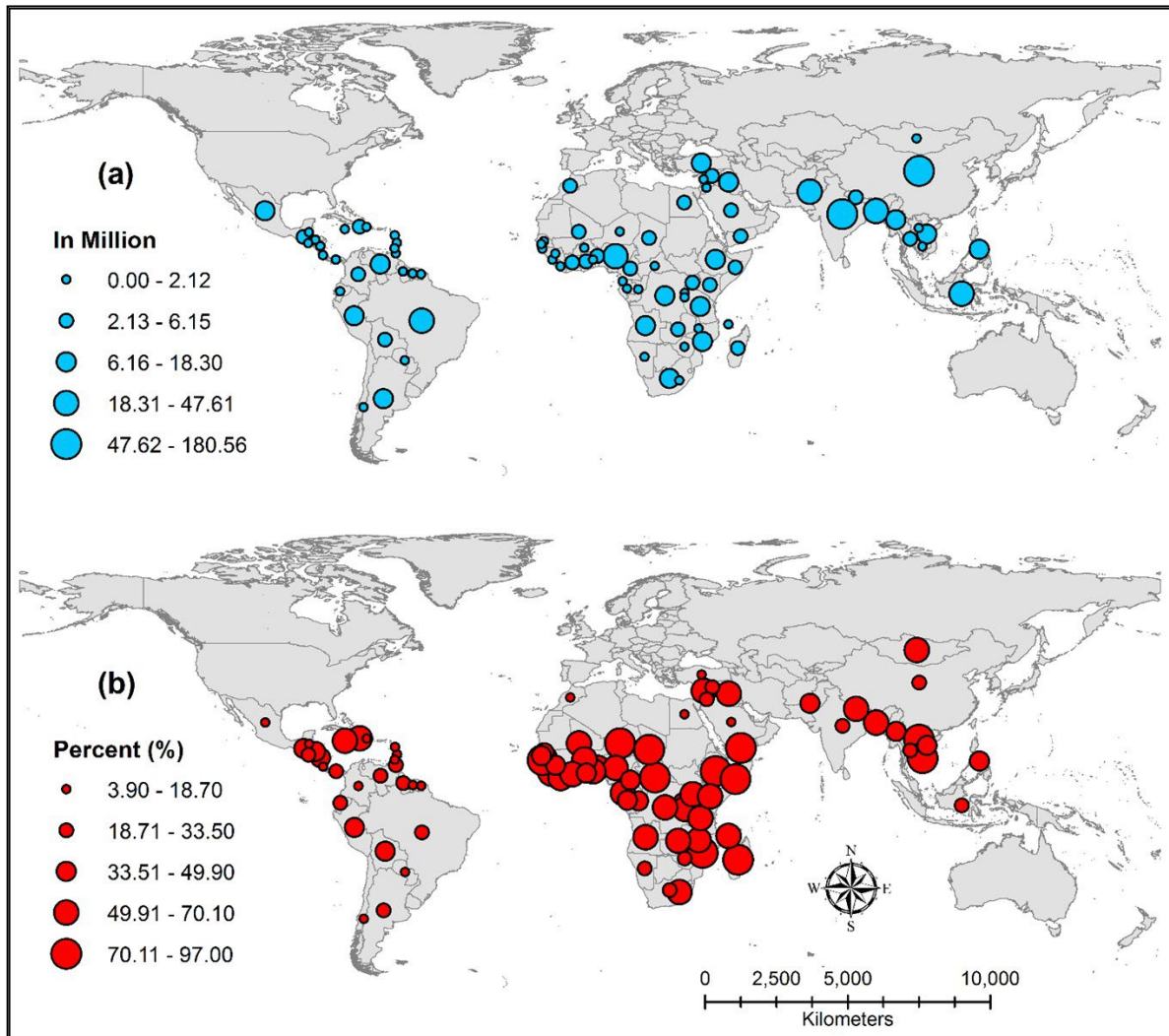


図4 発展途上国（アフリカ、アジア、ラテンアメリカ）における都市スラム人口と都市人口に対するその割合（国別）（2013年）。

出典：Murayama, Y. and Estoque, R. (2020). Urbanization: Concept, Mechanism, and Global Implications. In Himiyama, Y. et al., *Human Geoscience*, Springer & Nature, Singapore. データはUN-Habitat 2013による。